



話で、沖縄の屋良くんなども参加しています。「心の花」の編集にも八五年に入れてもらって、ケンカもしたけれど、同世代の仲間との存在は大きいとつくづく思います。

それから 中山明くんが、手元の資料では一九八七年から九〇年までの開催が確認できますが、不易の会という若手歌人の研

究会を東京の目黒で開催していた。そこへは、黒岩、谷岡、大野の他に、加藤治郎、川野里子、坂井修一、水原紫苑、穂村弘、米川千嘉子などの同世代歌人が集まっています、そこで知り合った人もいましたね。

**谷岡** 大野さんは八九年に岡井隆論で現代短歌評論賞を受賞しましたね。

**大野** その二年前に谷岡さんも受賞していますね。「心の花」は幸綱先生の影響で評論を書く歌人が多い。

ただ私は国文学科出身ではないし、最初は歌人の名を雑誌で見ても、生きているのか死んでいるのか分からない、最初に出席した出版記念会が『サラダ記念日』で、出版記念会ってこういうものかと思ったら、いかに特殊な体験だったか、あとでわかったりした。

ただ、あとで考えると幸綱先生が推薦してくれたらしいですが、当時の「歌壇」、「現代短歌 雁」、そして「短歌往来」などはわれわれ若手はかなり長い評論を書かせてくれた。こっちはまさか読まないで書くわけにはいかないから、かなり必死に歌集を読んだ、書いた。まあだから「雁」はつぶれたのかもしれないが。(笑)

**谷岡** 思い出の歌人、思い出のシーンはありますか？

**大野** いろいろな人の思い出はありますが、ここで思い浮かぶのは一人は菱川善夫さん。確か谷岡さんの評論賞受賞の二次会で、岡井、塚本を殺せ！と大演説をぶった。つまり岡井、塚本を殺すような歌があらわれないと歌の未来はない、ということなんだけれど、当時のライト・ヴァースの風潮に激していたんでしょうね。

もう一人は石川不二子さん。私の評論賞と同年に短歌研究賞を受賞されて、二次会の後に谷岡さんと駅の改札まで追いかけて行って「もう一軒飲みましょう」と言ったら、「これで飲みなさい！」と言って賞金の一万円札をバツとわれわれに投げつけた。あれはかっこ良かった、もちろん拾ってお返ししたけれど。それでいて恋愛の話をする時は、黒目がちな、少女のような眼になるんですよ。豪快かつ繊細な先輩でした。

**谷岡** 大野さんは全国大会やネット歌会などの発足に関わっているわけですが。

**大野** これも思い返すと不思議なんです。「心の花」では全国大会の復活(一九八七年)、ホームページ開設(二〇〇一年)、イ